

『鑑定士と顔のない依頼人』

2013年/イタリア/ジュゼッペ・トルナトーレ監督作品

光と影を楽しむ

会員 松尾 真誉 (75期)

この映画は、「ニュー・シネマ・パラダイス」(1988年/イタリア)を監督したジュゼッペ・トルナトーレ氏の監督・脚本作品である。「ニュー・シネマ・パラダイス」も名作と評される作品であり、ご覧になった方も多いと思う。同氏の作品は、奇跡や大災害が起きて話が展開するようなスペクタクル要素はないが、私は、登場人物が、日々の延長で起きる人生にとって大きな事件に向かい合う姿を描き出すことに長けている監督だと思っている。新作を見つけては観るようにしている数少ない監督の一人である。

主人公は、美術品の鑑定士として生計を立てているバージルである。バージルは鑑定士として成功しているが、潔癖症の性質であるゆえ、絵画の女性しか愛せず、独身を貫いているという人物である。そんなバージルが、クレアという女性の依頼者から相続した絵画の鑑定と競売への出品の依頼を請けたことからストーリーは進む。バージルは、クレアから、広場恐怖症で自室から出ることができず、引きこもったまま何年も生活をしてきたことを告げられる。ここに、顔を見せない依頼者のために潔癖症の鑑定士が仕事をする、という一風変わった状況が出来上がる。

このように、登場人物も個性的であるが、本作の特徴的な点としては、様々な名画が作中に登場する点である。私は、かつて、芸術映像の世界を志し、映像制作に没頭する大学生活を送っていた。そのため、一応芸術を学んだことにはなっているが、絵画には疎い方だと思う。そんな私でも日本国内の美術館で見たことがあるような有名な絵画の数々が登場して

おり、明暗のコントラストをやや強くして撮影された映像がさらに絵画を美しくみせる。同時に、計算された明暗を作り出すライティングにも是非注目していただきたい。主な舞台となるクレアの自宅内や、バージルの自室内でのキアロスクーロ(いわゆる明暗法と呼ばれる絵画技法)を意識した映像作りは観ていてとても心地よい。レンブラントやカラバッジオの作品が好みであれば、このような映像表現の観点から本作をご覧いただいても楽しんでいただけるのではないだろうか。

さて、ストーリーは、バージルとクレアが壁越し、ドア越しの会話を重ねて仕事を進めることを中心に展開していく。顔を合わせることはなく、会話のみの交流であっても、回を追うごとに、これまで実在の女性を遠ざけていたバージルがクレアに興味を持っていく様子はどこか可愛らしさを感じる。それはやりすぎでは？と感じる場面もあるが、バージルが人生で初めて抱く感情ゆえの行動としてみれば、人の本能的行動としてはあり得るものなのかもしれない。しかし、本作はミステリー作品である。これ以上、内容に触れるのは野暮というものである。

主要な登場人物は少なく、また、人物間の関係は比較的シンプルなので、人間関係の把握は容易だと思う。是非、ご自身で、このバージルという男について、初回観た後の感想と、2回目を観た後の感想を比べてみていただきたい。きっと、視覚的な光と影だけがこの作品の味ではないことがお分かりいただけると思う。



『鑑定士と顔のない依頼人』
¥1,257 (税込)
発売・販売元：ギャガ
©2012 Paco Cinematografica srl.